

文学にみる 病と老い

Serialization **91**

文=長井苑子・注記=泉 孝英

上坂冬子 「おばあちゃんの ユタ日報」

文藝春秋1985年7月刊、文春文庫1992年2月収録（原文は1985年「信州女のユタ日報」と題して信濃毎日新聞に連載）。

花嫁として渡米した大正11年から70数年、自ら記事を書き活字を拾い、小さな日本語新聞を発行してきた女社長・寺沢国子。戦時中も日系人たちに希望と情報を与え続けた「ユタ日報」。……

（文庫本カバー裏表紙より引用）

昭和59（1984）年に米国胸部学会^{*1}の年次総会で臨床研究の成果を発表して以来、20年近く、毎年、学会発表とアメリカ各地を短期間ではあるがワンポイント訪問で立ち寄ることを続けてきた。

最初の地はカンザスシティ^{*2}であった。はじめての長旅で風邪をひき、明日は発表だというのに39度の熱をだして小さなホテルで臥せていた。食欲もなく、パンケーキ^{*3}ももうひとつというときに、日本料理のテイクアウトの店のお弁当が手に入ったときにはうれしかった。お店の主はおばあちゃん「戦争花嫁^{*4}ではないかな」とは、買出人の言であった。異国で日本の味を味わえば、元気で、翌日の発表は熱をだしながらもやれた。もう一つの別の思い出は、ソルトレイクシティ^{*5}に留学している先生を訪問したときのことであった。静かな町であった。異国風のすき焼き^{*6}を食べながら、先生の熱心な勉強の日々を目の当たりにした。食事の後、同行の先生に、ユタ日報社の社屋跡を教えられた。「ユタ日報」の名を知った最初である。

「おばあちゃんのユタ日報」の文庫本を買ったが、文庫本は長い間、20年ちかくも本棚に眠っていた。2ヵ月ばかり前、篠田桃紅「一〇三歳になってわかったこと 人生は一

人でも面白い」の本誌への紹介記事^{*7}を執筆している時に、「おばあちゃんのユタ日報」を思いだしたので、紹介させていただくことにした。

88歳の女社長「寺沢国子」

著者「上坂冬子」は、世界中せましと精力的にルポルタージュ^{*8}記事を発表し続けてきた人である。

信濃毎日新聞^{*9}社の武藤清晏（きよはる）社長から、ユタ日報の88歳の女社長の話を聞き、新聞も創刊号から保存されていると聞いて、早刻面会に行こうと決心した。昭和59（1984）年10月のことである。渡米し、88歳の女社長「寺沢国子」を取材、ユタ日報のバックナンバーを持ち帰り、この「奮闘記」をまとめたわけである。

『北五十二番、西千番通りの四つ角から二軒目に、白い四角い建物がある。表通りに面した壁に「The UTAH NIPPO」とある……。小柄な白髪のみつつめ髪の女性が寺沢国子社長であった。『紺のセーターに茶のズボンは、一見して仕事のほかはすべてに執着を捨てた人生を象徴している』と記している。

50坪ほどの社屋は新聞製造の機械類が半分を占め、残り半分に活字^{*10}の棚が占めていた。富士山の額も飾られていた。